



TITLE:

Schizoid心性について : 質問紙作成の試み

AUTHOR(S):

山川, 裕樹

CITATION:

山川, 裕樹. Schizoid心性について : 質問紙作成の試み. 京都大学大学院教育学研究科紀要 2002, 48: 211-223

ISSUE DATE:

2002-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57453>

RIGHT:

Schizoid心性について

～質問紙作成の試み～

山 川 裕 樹

About schizoid tendency

YAMAKAWA Hiroki

本稿においては、schizoid心性を取上げ、その質問紙作成の試みと結果分析、そして更に敷衍した考察を試みる。

本稿で云うschizoid心性とは何か、をまず述べねばなるまい。Schizoidとは、分裂(split)から派生した言葉で、邦訳では分裂病質を意味する言葉である。クレッチマー的定義では、schizoidは分裂病者やその近親者にみられる気質となる。また、英国精神医学会によるDSMでは、人格障害としてのschizoid、即ち分裂病質人格障害がある。その診断基準からすると、schizoid人格障害とは、対人関係の著しい限局状態を意味している。

ここで取上げるschizoid心性とは、それらとは全く違うわけではないものの、大部分で異なるものである。本論では、英国精神分析の一派、対象関係論やKlein派によって提唱されたところの一樣式、schizoidメカニズムやschizoid態勢を基礎とする。病的なものでもあるが、一般の人においても見られうるころのありようを捉えようとするものである。

それは、小此木(1993)が「シゾイド人間」と銘打ったものと近くなろう。小此木の「シゾイド人間」とはどういった概念か。それは、精神医学のschizoid personalityに由来する。古典的なschizoid personalityは、人とのかかわりを避け、内向的・脱俗的で、人格としての一貫性が弱いことが特徴であった。小此木の云う「シゾイド人間」とは、適応様式として社会的に要請されたschizoid personality的なありようのことである。特徴として、表面的にはかかわるものの“深い”かかわりは避ける、万能感が強い、その場その場に応じた人格を持つ、などである。「シゾイド人間」は、社会・文化の変化に伴った適応的な側面でもある。しかし、それは対象喪失を避けるための適応様式であるため、“悲哀の仕事mourning work”が等閑にされている危険性があるのではないかと示唆している。

小此木も、対象関係論が描出したころのありようを基礎において、現代人においても同様に見られるころの動きを示した。すなわち、深いかかわりを避けること、場面に応じたかかわりは示すもののころは本質的には引きこもっていること、その機制としては分裂splittingを基礎としたものであること、である。本論でのschizoid心性とは、対象関係論の概念、schizoidメカニズムを中心としたこうしたころの動きのことである。他者とのかかわりを巡って起こるころの揺れの一様態のことである。

本論では、こうした心性を質問紙法により把握することを第一の目的とする。そのために、まずschizoid心性とは如何なるものであるのかを先見の論述を元に検討せねばなるまい。そして、その後、schizoid心性と関連が深い依存性について触れ、実際の質問紙調査と結果について述べる。結果から考えられる事象を対象関係論概念を元に考察し、最後に、筆者の臨床体験の視点や物語作品も交え、総合的にschizoid心性を捉える試みを行いたいと思う。

1. schizoid心性について

1-1. 対象関係論から

本論で取上げるschizoid心性は、対象関係論の中でもFairbairn, W.R.D.やGuntrip, H.を中心として、Winnicott, D.W.の論攷を背景とする。ここでは、schizoidメカニズムを詳述したFairbairn (1952) によるものに代表させよう。

Fairbairnが云うには、schizoid状態の根本には自我の分裂splitting of the egoがあり、その結果として生ずるschizoid的特徴として、(1)万能的態度(2)情緒的な孤立と引きこもりの態度(3)内的現実へのとらわれ、この三点があるという。万能的態度とは、自分の欲求を満たすために人を扱ったりすることなどであり、情緒的孤立と引きこもりの態度とは、感情を他人に示すことがなく関わり合いを避けたりすることであり、内的現実へのとらわれとは、外的対象よりも内的対象の方に重きが置かれ、現実に関心を生み出すという行為が苦手であったりすることである。この三態が相互に絡み合うのがこの心性の特徴である。

それらから派生して演技性や知性化の防衛的態度が生まれる。演技性は、感情を他人に示すことの代償として演じることで、演技的であることで自己の核を無傷なまま保とうとする試みである。そして知性化は、情緒的問題を情緒領域で解決する代りに、知的領域で解決しようとするものである。どちらも、情緒的孤立を解消する為のschizoid的手段であるが、自我の分裂の本質的解決ではない。寧ろ、その更なる助長に終る。

Fairbairnが挙げたschizoidの特徴は、“情緒的”孤立にある。普通に他者とかわっているように見えても、心の中では“情緒的”孤立のまま引きこもっている人物もschizoid的であるとしている。こうした意味に立返り、本論においては、情緒的孤立の側面を重視し、他者との情感溢れる交流ができず、かわりを持っていても何かしら空虚な感じを抱いているタイプの人物をschizoid心性を有するとする。

1-2. 存性から見たschizoid

上記で見たschizoid心性に至る背景として、Fairbairn(1952)は前期口唇期に着目し、彼独自の乳児期の対象関係の発達論に関連して述べている。

彼は対象関係の発達を、対象への乳児的依存が対象への成熟した依存へと少しずつ席を譲っていくプロセスだとしている。前期口唇期の特徴である「吸うこと」すなわち「受取ること」を中心とした関係が、後期口唇期に至り「愛すること」と「攻撃すること」とのあいだのアンビバレンスを経験し、移行的段階を経て、「与えること」を中心とした関係に推移していく、というのだ。Fairbairnの発達論の特徴は、依存から独立へと至る動きとしたのではなく、未熟な依存が

成熟した依存に推移するという、対象希求的な態度として扱っているところにある。

前期口唇期のschizoid態勢の葛藤については、以下のようなものである。前期口唇期において、乳児が愛するというのは、吸う（＝体内化）意味を持つ。対象と一体化するという、原始的な愛の形である。しかしその結果引き起されるのは、対象の消滅に他ならない。対象は食べてしまったのだから消滅は当然である。そこで、対象をなくさないようにするには、どうすればいいか。吸わない、愛さないという手を取るより外にない。

schizoid状態にある根源的葛藤とは、愛である体内化への衝動が対象の破壊になる為に抱く「愛すべきかそれとも愛すべきでないか」の葛藤なのである。葛藤の結果、愛することを恐れ、対象との間に障壁を築き、対象を拒絶し、次第に内界へとエネルギーが向けられていく。

Guntrip, H. (1971)は、同様のschizoidの愛情葛藤を“入る－出るの葛藤in-and-out program”として論じている。schizoid的人物の愛情関係は、口唇期的な自己と対象の同一化を基礎とするため、対象への愛情が成立すると、対象喪失や自己喪失の危険が生じる。対象に近付きたい感情はあるものの、愛を求めると自己を失ったり対象を失ったりするのではないかと恐れ、愛情関係へ「入ったり出たりin-and-out」を繰り返す。このような特徴をGuntripはin-and-outの問題と名づけた。喪失の不安に耐えられない場合は、情緒領域からの退却が起り、情緒的アパシー状態になるものもある。これが、引きこもりのschizoidの内的メカニズムであるとし、一見平静に見える状態でも、内的にはin-and-outの葛藤が基礎にあることを説いた。

このように、schizoid心性においては、対象との依存関係が深く関係している。Fairbairnは依存性が発達・変化するものだと言ったが、これと同様の観点に立っているのが関(1982)の依存性の研究である。

関は依存性に「統合された依存性」という概念を導入した。統合された依存性とは①人格に内在化している②依存性の存在を認めている③依存性の存在に不安を感じない④自立性と相補的に存在する、この四つの下位概念を含むものである。「統合された依存性は、人格適応上、積極的な意味を持っており、その欠如は、適応上、問題性を含んでいる」とされ、“うまく依存できること”を取上げた研究である。

そしてそのほかにも「依存欲求」・「依存の拒否」の二概念を持ちだし、依存性について三方向から検討を加えている。「依存欲求」とは、「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める欲求」であり、「依存の拒否」とは、「顕在的には他者への依存を拒否する形で現れるが、潜在的には依存不安があると推察される態度」のことである。「依存欲求」は、他者からの積極的顧慮を必要とする点が「統合された依存性」と異なる。

関はこれら三概念を測定する質問紙を作成し、依存性についての検討を加えた。本研究ではこの質問紙を用い、Fairbairnの観点から捉えたい。Fairbairnの成熟した依存が「統合された依存性」にあたる。そして、未熟な依存葛藤である「愛すべきかそれとも愛すべきでないか」のうちの、「愛すべき」が関の「依存欲求」であり、「愛すべきでない」は「依存の拒否」に相当すると考える。成熟した依存を有する場合は心性が低く、未熟な依存を有する場合はschizoid心性が高くなることだろう。

但し、関も述べているように、厳密な意味での「統合された依存性」は、「統合された依存性」“尺度”の高さだけで表現されるものではなく、未熟な依存尺度の二つが低いことも必要とされ

る。「統合された依存性」は三尺度間の力動関係によってより正確にあらわされるのである。本研究では、このことも視野に入れ、質問紙を用いる。

1-3. 質問紙調査に向けて

上述の特徴を持つschizoid心性であるが、それを測定する質問紙は見られない。よって、本研究においてはschizoid心性を測定する質問紙を作成し、その内的構造を知ることを第一の目的とする。そして同時に、関の依存性質問紙を利用して依存性を測定し、schizoid心性と依存性との関係を調べる。

Schizoid心性質問紙の作成にあたっては、主として、日本におけるschizoid患者の症例報告での患者や治療者の発言を基に項目を構成した。上述の理論を背景とするものの、治療場面で語られた・感じられた言葉を用いることによって生じるリアリティを重視したいがためである。

また、依存性各尺度とschizoid心性との関連を独立に見るだけでなく、依存性尺度の組合さりようとschizoid心性との関連も見えていく。より細かく依存性を見るには、三つの力動的関係を見る視点が必要であるためである。よって、本研究では、依存性三尺度によって被検者全体をいくつかのグループ化して、そのグループごとのschizoid性の異なりを比較することで、より立体的なschizoid性把握を試みていく。

2. 調査目的

本研究では、schizoid心性測定質問紙を作成し、その内実を探索的に調査すること、そして、それを依存性から見るとどういった姿が立ち現れてくるのかを調査すること、この2点を調査の目的とする。後者の手続としては、①依存性得点によってグループ分けを試み、②それに基づいて、schizoid心性を各グループの様態とグループ間の比較により質的な理解を試みる。

依存性とschizoid性の関連について、以下のような仮説を想定する。[仮説1] 未熟な依存が高ければschizoid性も高くなり、成熟した依存であればschizoid性は低くなる。[仮説2] 依存性の組合わせによって、schizoid心性に影響を与える。たとえば、依存欲求が高くとも統合された依存があればschizoid心性も低くなること、依存の拒否がただ高い群よりも依存欲求・依存拒否共に高い群の方がschizoid心性が高くなることが考えられる。

3. 調査方法

3-1. 予備調査

schizoid質問紙の項目を絞り込み、大まかな構造を知るために、質問紙法により予備調査を施行した。項目収集のため、複数の論文から、schizoid心性を示すに適した文章を選んだ。そしてこの文章を臨床心理学専攻の大学四回生及び大学院生により検討を加え、最終的に67項目を選定。それに緩衝項目も加え、91人の大学生対象に予備調査を試みた。回答方法は7件法。

G-P分析や因子分析を用いて不適当な項目を削除し、最終的に45項目を選出した。

3-2. 本 調 査

①schizoid質問項目

予備調査で選定された項目45項目に緩衝項目12を加えた、合計57項目（7件法）。

②依存性質問項目

関の依存性質問紙39項目を使用。schizoid質問項目と統一をとるため、7件法で施行。

schizoid質問項目→依存性質問項目の順に配列。なお各質問項目内で項目をランダム配列し、カウンターバランスも考慮した。7件法は数字で示し、1「全く当てはまらない」－7「非常に当てはまる」の言葉を添えた。

調査時期は1995年11月中旬から12月初旬。アンケート方式、無記名で実施。大学生329名（男子149名女子180名・平均年齢20歳）から回答を得た。回収率は76.5%。

4. 調 査 結 果

4-1. 因子分析から

[schizoid質問項目の因子分析－因子の決定－]

全項目の統一性を確認するために主成分分析をし、結果3項目を削除した。その後、schizoid心性質問紙の内的構造を明らかにするために主因子法による因子分析を試み、5因子が抽出された。その詳細については山川（1996）に譲り、ここではどういう項目が分類されたのかを表1で示す。項目内容から、各因子を、以下のように名付けた。第一因子「情緒関係悲観」、第二因子「内的未統御感」、第三因子「外界への迎合」、第四因子「自己抑制傾向」、第五因子「対象の物扱い」。以下本稿では、「情緒悲観」「未統御」「外界迎合」「自己抑制」「物扱い」と略記する。

なお、被検者毎の尺度得点は、標準化された因子得点を用いた。以下では、それを各被検者の尺度の得点として扱う。

表1 : schizoid心性尺度項目

第一因子・・・情緒関係悲観	第三因子・・・外界への迎合
気持ちを表に出しても出さなくても結局人から受け入れられないと思う 人の正面から関わるのがいやだと思っている どんなことがあろうとも、わたしはたいいていの人に好かれたいと思う 人付き合いは感情をこめないでいた方が楽でいい 人と話すときは感情を込めず、人とのあいだに防波堤を築いているところがある 本当の自分は人から受けとめてもらえないと思う 自分も相手の心に入っていくか、人にも自分の心には入れたくない わたしが誰かを愛するのは、その人にとって迷惑だろう 感情はあるが、それをちゃんと表現しないことが多い 誰かにわかってもらいたいと思うが、自分からそれを口に出したくない わたしはわたしの役割を忠実に演じているだけだと思う	相手になんとなく話を合わせることで拒絶されないようにしている あまり本心を言わず、ほとんど人に対してもつい顔色を見てしまう 無理して相手に合わせて、あとでそのことが厭になるところがある 友人達からなにか期待されると、自分の無能力さを思い知らされる 行動をおこすよりもあれこれ思いをめぐらしてしまうところがある 自分が安全なところは無傷なまいたいという気持ちが強い わたしは他人が思っているイメージに合わせて行動している 人に自分の気持ちを表現するのが難しいと思う いやな現実があるとどこかへ逃げたい
第二因子・・・内的未統御感	第四因子・・・自己抑制傾向
意識と感情が自分の中でまとまらないところがある 感情のまま動くとんでもないことを起してしまうのではないかと ことがある 自分の考え方が周りの人と違うんじゃないかという気がする わたしは世間一般からはみ出していると思う 言葉は口に出した途端に自分の思いからかけはなれると思う 自分の中にあれこれ矛盾した存在があって、まとまった自分がない ように思う 考えていることと感じていることのあいだにズレがあると思う 気が付いたら違うところに意識がとんでいるところがある 自分のことを見せないように演技している面がある もしも甘えてしまったら理性を失ってどうなってしまうか判らない フタを開けて自分を見せるのがこわいフタを閉めているのもつらい	自分は他の人達とは違っている わたしはわたしの深いところにあるものを覆い隠しているところがある 人前であるがままの自分を出すことができない 自分の気持ちをさとられないように話すときがある 人とは距離をおいて接するところがある 人前であるときのわたしは本当のわたしではない 自分の感情・考えをストレートに出すことに抵抗がある 自分で感情を持たないようにしているところがある
	第五因子・・・対象の物扱い
	他人を、自分の要求を満たすための手段として扱ってしまう わたしが人に好意を示すのは、そのことが自分の利益になるからである わたしは、「普通の人」を見下しているところがある

〔依存性質問項目の因子分析－因子の決定－〕

主因子法による因子分析を試みた。固有値の推移から、因子数を三因子と定めて、Varimax回転で因子分析を行った。

詳細な結果は山川（1996）で報告した。ここではそれを簡潔に述べると、依存欲求・依存の拒否はおおよそ関の結果どおりだが、関が「統合された依存性」と名付けた因子に対しては、若干性格の異なるものが抽出された。「成熟した依存」を表しているというよりも、愛着対象の有無を問うものや自分のこころの拠所となっている誰かがいることを示唆する項目が主流を占めたことから判断して、以下では「依存対象の存在」と呼ぶことにする。

依存性の項で述べたように、関自身、依存性が統合されているか否かは、ある一つの尺度で表されるのではなく、上記三因子のバランスによって表されるとしている。「統合された依存性」ではなく、「依存対象の存在」を示す因子となったことは、概念内容が明確になったとも云える。

被検者毎の依存性尺度の得点は、schizoid尺度と同様に、因子得点を尺度得点として扱う。以下においては、それぞれ「依存欲求」「対象存在」「依存拒否」と呼ぶ。

4-2. クラスタ分析によるグループ分け

被検者を依存のあり方ごとにグループ分けするために、依存性尺度得点を元に、ワード法によるクラスタ分析を施行した。デンドログラムからクラスタ数を7と定め、被検者を7つにグループ化。以下ではそのグループを、CL.1-CL.7と表記する。

表2-1はクラスタごとの依存性の平均値・SDである。その平均値から、グループごとの依存性尺度得点の関係を見るためにプロフィールを描いてみた（図1）。CL.1はどれも平均程度、CL.2は依存欲求が低く依存拒否が高い、CL.3は依存欲求・依存拒否共に低い、CL.4は依存欲求と依存対象が高く依存拒否は低い、CL.5は全て高い、CL.6は依存欲求が高くあとは低い、CL.7は依存欲求と依存拒否が高く対象存在が低いことが分る。

そして、このように分けられたグループごとで、schizoid心性得点がどのようになっているのかを調べた。表2-2がグループごとのschizoid心性5因子の平均値・SDであり、それを元に描かれたグループ別プロフィールを図2に示す。これより、CL.1はどれも平均程度で、CL.2は情緒悲観が高く自己抑制はやや高く、CL.3は物扱い以外が全て低く、CL.4は情緒悲観と外界迎合、自己抑制が低く、CL.5は未統御、外界迎合が高く、CL.6は未統御と外界迎合がやや高く、CL.7は情緒悲観と外界迎合、自己抑制が高いことが分る。

表2-1：クラスタごとの依存性平均・SD

	CL.1 N=75	CL.2 N=62	CL.3 N=37	CL.4 N=43	CL.5 N=40	CL.6 N=34	CL.7 N=38
依 存 欲 求 平均	-0.234	-0.611	-1.236	0.414	0.897	1.018	0.338
SD	0.525	0.712	0.760	0.713	0.441	0.608	0.728
依存対象の存在 平均	-0.132	-0.057	0.227	1.104	0.898	-0.886	-1.271
SD	0.388	0.848	0.836	0.520	0.528	0.583	0.469
依 存 の 拒 否 平均	-0.086	1.067	-1.056	-0.835	0.630	-0.794	0.449
SD	0.361	0.537	0.636	0.579	0.684	0.524	0.580

表 2-2 : クラスターごとのshizoid性平均・SD

		CL.1 N=75	CL.2 N=62	CL.3 N=37	CL.4 N=43	CL.5 N=40	CL.6 N=34	CL.7 N=38
情緒関係悲観	平均	0.094	0.400	-0.367	-0.512	-0.198	-0.161	0.450
	SD	0.564	0.916	0.707	0.872	1.109	0.812	0.857
内的未統御感	平均	-0.059	0.097	-0.643	0.028	0.408	0.233	-0.086
	SD	0.782	0.743	0.969	1.038	0.876	0.876	0.800
外界への迎合	平均	0.013	-0.045	-0.867	-0.252	0.562	0.213	0.395
	SD	0.668	0.817	0.960	0.862	0.656	0.853	0.733
自己抑制傾向	平均	-0.050	0.203	-0.418	-0.245	0.037	0.003	0.412
	SD	0.602	0.822	1.109	1.157	0.831	0.669	0.551
対象の物扱い	平均	0.012	0.044	-0.006	-0.001	-0.008	-0.078	-0.011
	SD	0.750	0.742	0.871	0.945	0.906	0.991	0.872

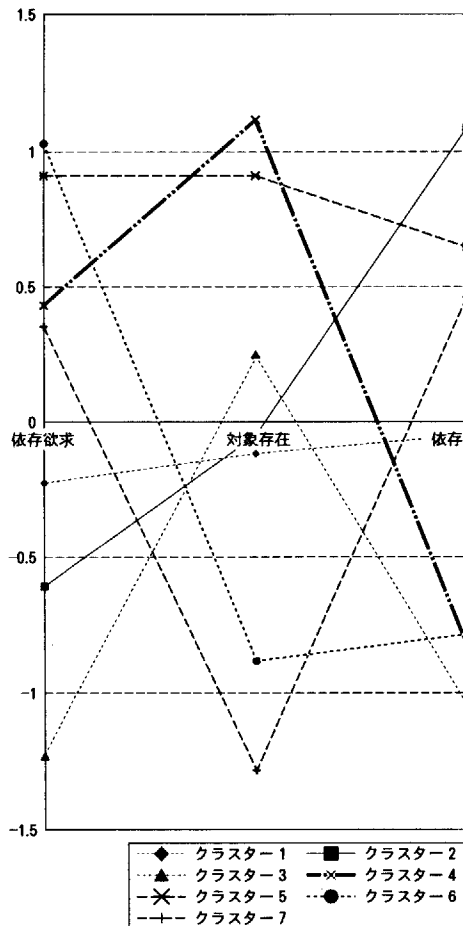


図 1 : 依存性プロフィール

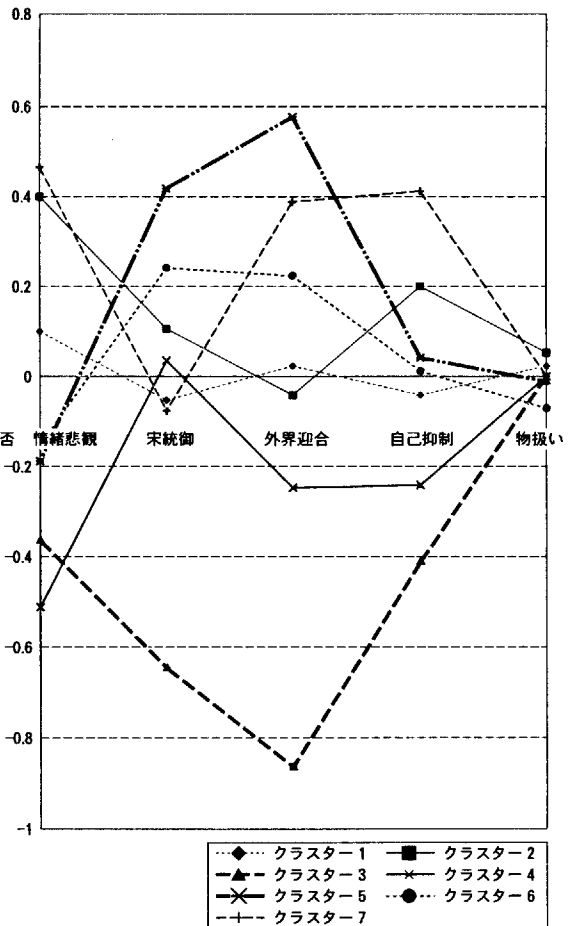


図 2 : schizoidプロフィール

5. 調査結果考察

5-1. schizoid心性質問紙について

schizoid心性の各因子の持つ内実を、対象関係論の概念とつきあわせてみる。

[第一因子-情緒関係悲観-について]

自分の受入れてもらえなさの自覚、外界と関わることに對する否定的な態度を特徴とする因子である。

この因子は、Fairbairn(1952)の情緒的孤立を意味する因子であろう。引きこもりではないものの、情緒豊かな関係をもてないと思っていることが予想される因子である。

[第二因子-内的未統御感-について]

この因子は、自分の内側に感じるschizoid性が中心となっていると云える。統合されていない、抛っておくと自分でもどうなるか分らない感覚が、この因子の持つ特徴である。

これを、schizoidの語源である分裂の観点からみると、自分の内界が分裂してと考えられる。自我の分裂と云うよりは、質問紙の文章を借りれば、“ズレ”と云うニュアンスか。何かしら自分の感情や気持に違和感を感じ、自分自身でも不安に感じ、まとまりを欠いているように思える、そんな感覚を表す因子であろう。

[第三因子-外界への迎合-について]

他者の描く自己イメージに自らを鑄造しようとする項目が集った因子である。実感を伴った「わたし」によるかかわりが無い、と見ることもできよう。

Winnicott(1958,1965)は、schizoid的現象に対して、本当の自己true selfと偽りの自己false selfの概念を提言している。これは、自らの自発的な振舞いが無視され、認められないことで、本当の自己とでも呼ぶべき“イキイキとした自分”が持てなくなり、その代り相手に対する服従と環境に対する順応を目的とした偽りの自己が前面に出ることを述べたものである。この因子は、こうした現象と関連しているだろう。

[第四因子-自己抑制傾向-について]

自分を抑えたまま人と接している、という項目が集った因子である。先ほどWinnicottの概念を参照したが、その図式で言えば、偽りの自己があると云うよりも、本当の自己的かかわりが欠落していて、どこか自分を抑えたまま他者と対峙している、となる。この裏には、“他人のいる前で安心して自分自身であることができない”という感情が隠されていると予想される。

[第五因子-対象の物扱い-について]

この因子に一番強く負荷する項目は三つと少ないが、構成している項目は、孤絶・部分対象的対象関係を持つと云われるschizoid者を特徴づける項目ばかりである。Fairbairnの挙げるschizoidの主要三特徴の一つ、万能的態度であると云えよう。この因子は、他者が一つの人格を持った全体的他者として現れていない状態を描いている。

5-2. 依存性タイプ別考察

ここでは、以上で見てきたschizoid各因子の考察も加味して、依存性を基にして分類された各グループごとのschizoid心性の特徴を明らかにしたい。その際便宜上、schizoid性が低い集団

(CL. 3 と CL. 4) と schizoid 性が高い集団 (CL. 2 ・ CL. 5 ・ CL. 6 ・ CL. 7) に分けて述べる。なお、CL. 1 は、依存性も schizoid 性も全て平均程度なので考察は省く。

[低schizoidグループ]

まず、CL. 3 について述べる。

依存性から言えば、やたらと人に頼りたいと思わず、しかし、依存を拒否するわけでもないグループである。これは関の言う「統合された依存」を持つ人物像に近い。適度な依存関係を持てる、「成熟した依存」関係を結べるグループである。

schizoid 得点は、全般的に低い。これにより、適応的な依存のかたちを身に付けたものは schizoid 得点が低いとする仮説が裏付けられた。さらに、外界迎合性や、内的未統御感に対して他群とかなりの差があったということから、成熟した依存性を持つ人物においては内的にも安定し、他人の顔を窺いすぎないことが分る。

次に、CL. 4 に移る。

この集団は、依存欲求はあるものの、依存対象を見つけることでそれが充足されている人たちのグループであろう。「甘えたくて、そして甘えられる」集団である。

CL. 3 に似て、このクラスターも schizoid 得点は低い。依存欲求はある程度高いので、この集団が統合された依存性を有しているかどうかは少し疑問符がつくものの、依存欲求が高くとともに依存対象の存在によって、schizoid 性は高くないことが分った。とはいえ、schizoid 心性尺度を細かく見てみると、“かかわり方”に主眼がおかれた因子である情緒悲観・外界迎合・自己抑制は低いものの、“内的な安定度”を示す未統御は平均程度である。自ら持つ依存欲求の高さは、かかわりが持てていることにより schizoid 的葛藤は落着いているものの、自らの内的な安定についてはまだ課題が残っていると云うことか。

[高schizoidグループ]

これに属する 4 グループを schizoid 性プロフィールの形態により、内界未統御感が高い CL. 5 と CL. 6 と、情緒関係悲観・自己抑制が高い CL. 2 と CL. 7 の二グループに分類して考えてみる。

まず、前者の CL. 5 と CL. 6 を取上げよう。この二つは、schizoid 心性に関してかなり類似したプロフィールである。程度の差はあるものの、未統御と外界迎合が高いという点では共通しており、他の因子は同程度である。つまり、内的にまとまった感じを得ておらず、つい他人に合わせってしまう状態だろう。

CL. 5 と CL. 6 に共通する依存性の特徴は、依存欲求の高さである。このことから、未統御と外界迎合の高さが依存欲求の高さと関連していることが想定できよう。CL. 6 が依存欲求のみ高いグループであることも、依存欲求と未統御・外界迎合との繋がりを裏付けるものである。

その CL. 6 の依存性の質は、自ら依存しようとしないわけではなく、むしろ依存したいのだが、依存する相手が見つけられない、依存願望が空回りしている、「甘えたいのに甘えようがない」ものだろう。

翻って CL. 5 は、依存性に関してはかなり複雑なタイプである。全ての依存性因子が高く、単純に依存欲求が強いとだけは云えない。依存したくて実際に依存できる人はいるが、やはり依存しようとしな。高度にジレンマを持つタイプなのだろうか。関(1982)の研究においても同様のタイプが抽出されている。しかしながら、関の研究の場合、依存性第二因子が「依存対象の存在」

ではなく「統合された依存性」であると想定していたことも関係するだろうが、この集団の人物像は分り得ないとして、関は解釈を避けている。

筆者は、この集団は依存できる状況下でも素直に依存できずに、激しく葛藤してしまう人たちではないだろうかと考える。「甘えたくて甘えられる人がいる、でも甘えられない」グループと云えようか。このグループについては、後にもう一度考えてみたい。

次に、CL. 2とCL. 7について取上げる。

これらの類似性の根拠としたのは、情緒悲観と自己抑制の高さである。すなわちこの二グループは、他者との情緒的関係を持つことに対してペシミスティックな感情を抱いており、かわりをもつときにでも、自己を抑え気味にしていると云えよう。

これら二クラスターは、共通して依存拒否が高い。今見た二つの因子は、外界とのかかわりを持たない・持てないという内容的な特徴をもち、依存拒否の態度に強く関連する心情だと考えられる。よって、この両者に強く影響を及ぼす依存性の因子は、依存拒否であろう。

その依存拒否の因子が単体で突出しているのはCL. 2である。これは、依存したいとはあまり思わず、依存することに対して否定的な態度をとるグループである。依存欲求も低いので、他者との関係を持とうとしない傾向だけがでている、孤高の人的存在だと考えられる。

CL. 7は、依存したい気持は十二分にあるのだが、人に頼らない態度をとってしまう、依存に対して葛藤を抱えているタイプである。「甘えたいのに甘えられない」グループだと云えよう。

他者との関係において、依存したいと思っても、依存拒否的な態度をとってしまう。schizoid性の因子と絡めて云うと、「甘えたいのに甘えられない」ゆえに、情緒的なかわりに対して悲観的な態度をとり、つい自分を抑えてしまう傾向があるものの、CL. 2とは異なり、やはり甘えたい気持が強いから、他人に合わせた態度をとろうとするのだろう。情緒悲観・外界迎合・自己抑制は外界とのかかわりがテーマとなっている因子であり、この三因子が高いことは、この一群は他者とかわる際に多大な逡巡を抱くことを示唆している。

以上、大きくそれぞれの特徴を見てきた。改めてまとめると、CL. 5とCL. 6は、心の内側にまとまらないものを抱えている「甘えたい」一群であり、CL. 2とCL. 7は、対人関係において、自分自身を出さない・出せないと思っている「甘えにくい」一群であると云えよう。

[CL. 5とCL. 7について]

schizoid心性についてより深く考えるため、ここではschizoid心性が高いCL. 5とCL. 7を集中的に比較検討してみたい。

schizoid性が高いと看做しうるこの二つのグループは、両者とも依存欲求と依存拒否が高く、相反する対象関係の態度を有している。これは、依存欲求と依存拒否の両方が高い群は、よりschizoid性が高くなるという仮説を裏付けるものであると云えよう。

さて、先ほどのschizoid性のプロフィール型類似性による分類では、CL. 5は依存欲求が強いグループに、CL. 7は依存拒否が強いグループに分類した。にもかかわらず、依存性のプロフィールは両者とも依存欲求も依存拒否も高くなっている。異なるのは対象存在の高さのみである。では、なぜそう捉えられることになったのか。

ここで、それぞれの依存性を詳しく見ることで、依存対象の存在の有無が、依存欲求と依存拒否の“心理的” “質的” 強さを変えらることを示したい。

甘えたいのに甘えられないタイプであるCL. 7 は、依存対象が存在しない。その為依存欲求はこころの内にあるが、現実には表れ出すことはないと考えられる。実際には依存できず、かかわることに対して葛藤を抱いている。この場合、心理的に前景にあるのは依存拒否の態度となる。

甘えたくて甘えうる人がいるにもかかわらず、やはり甘えられないという、高度に矛盾するようなタイプのCL. 5 は、根本にある依存葛藤はCL. 7 と同じである。“甘えたいのに甘えられない”のだが、甘えうる相手もいる状態である。ただCL. 5 は、CL. 7 に比べると依存できる相手が存在する分、依存欲求のままならなさがクローズアップされるのではないだろうか。

甘えられる相手がいるからといって、甘え欲求は満たされるとは限らない。土居（1993）は、「元来甘えることが満足されるか否かは相手次第」と述べている。CL. 5 に属する人は、現実には甘えられる状況下でも甘えられないことを知るが、甘え願望を適度に抑えることができずに、内的な葛藤が強くなるのではないだろうか。

程よい対象関係をもともと形成できている者ならば、程よく甘えられれば、依存欲求は満足されるだろう。しかし、依存にまつわる葛藤がもともと強い人物であれば、程よく甘えられず、依存欲求は満たされずに残ってしまう。むしろ、依存対象が存在する分だけ、依存欲求は不如意なものとして一層強く感じられてしまうのではないだろうか。

このような心理的背景があり、その結果、CL. 5 は依存欲求がより強く感じられてしまい、CL. 7 は依存拒否が主として感じられると推測される。CL. 5 は、今見たように、依存対象は存在するものの、それによって、不満足な依存欲求がより際立つという背景があると推測できよう。

この事実から考えてみると、依存とはきわめて関係性の概念であることが分る。依存性三因子を単純に高低で判断するだけでなく、組合されることでそれぞれの因子の持つ意味合いが変ってくる可能性すら存在するだろう。勿論、上記は推測の域を出るものではないが、schizoid心性の意味合いを考えることから、依存性の質的意味を逆照射できたのではないだろうか。

5-3. 全体をふまえて

まずは、仮説の検証を検討する。仮説1については、考察で検討したようにschizoid心性が低くなっていたのは、より成熟した依存をもつ一群であり、schizoid性が高いクラスターの依存性は、未熟な形を持っていたことから、その正当性は検証された。仮説2も、CL. 4 やCL. 5・CL. 7 の結果からして、その正当性は確かめられたと云えよう。

依存性の因子が、「統合された依存性」ではなく「依存対象の存在」と変ったことで、一つ興味深いことがわかった。

CL. 6 とCL. 4 は、明らかにCL. 4 の方がschizoid性が低い。CL. 5 とCL. 7 は、考察で見たようにCL. 5 の方がschizoid性の質的な面においてより前進的な側面があった。この二つを併せて考えると、依存対象の存在はschizoid心性を低下させると云える。しかしながら「成熟した依存」に当るCL. 3 は対象存在因子はそう高くない。

Schizoid心性の高低という軸から考えると、依存性の三因子は複雑に絡み合った序列があると云える。前節の末尾で述べたように、例えば依存欲求の高低の意味を、単独で述べられないようにも思えてくる。依存対象を得ることの意味すら、他因子との関係によって変動する。このことは、今後よく考えてみる必要があるだろう。

6. 再び, schizoid心性について～筆者の意見～

依存できる対象との関係を持つことの重要性は本研究によって検証されたと云えるが、しかしそれは云ってみれば当り前のことでもある。実際にかかわりを持つ中であれこれ経験していくことで、schizoid的葛藤は修正もされ、自らの内で消化してもいける。問題は、何時如何にしてそうした経験を経ているか、であろう。

やや卑近な例になるが、“人（異性）と接触すると動物（十二支＋ネコ）に変身してしまう呪いにかかっている”というモチーフが出てくるマンガがあった³。この設定自体、人と関わる上で大きく障害となってしまう、schizoid心性の観点から見ても誠に興味深いものである。とりわけ筆者の目を惹いたのは、ネコに憑かれた者には普段プレスレットによる封印がかけられていて、それを外すと見るにおぞましい物の怪の姿になってしまうという展開の話であった。

動物なり物の怪を他者が如何に受入れるかという話は、『蛙の王様』然り『美女と野獣』然り、古く民話や童話に見られる設定である。その比較検討も興味深い課題であるがここでは取り上げない。この物語が人気をもって子どもたちに受入れられているという事実の方が重要である。

人と接触すると人の姿を保てなくなる、異形の姿が曝されるというのは、本稿で見てきたschizoid心性の根本的葛藤を物語の形式で表現していると筆者は考える。作中でも、こうした対人葛藤が幾度となく語られる。母親に受入れられなかった少年（自らの産んだ子を抱くことができない悲劇、それを引受ける子ども）の話であったり、苛めに合い緘黙となった少女（母にも話せず誰にも話せず一人で抱え続ける）の話であったり。かかわること自体に臆病になっている者が、如何にしてかかわりを持てるようになるのか。こうしたところの動きがマンガという形で物語化され、そのインパクトを知ることができる。筆者が接する不登校の女子中学生で、このマンガを、とりわけ上述の物の怪エピソードを気に入っていると述べた子が複数いた。筆者の感じたテーマに類することを、彼女たちが意識的にせよ無意識的にせよ感じているからではなかろうか。その物語への思いを語ることで、彼女らは自分一人ではとうてい表現しきれないところの機微を伝えてくれているように思う。

大切なのは、そうしたところの動きに思いを馳せることであるように思う。本研究の結果を、甘え経験の重要性、とまとめてしまうと、結果のみを重視して過程を見ぬ荒技に陥る危険がある。

「カウンセリングですごく楽になっている面もある。でも時々、自分はどこで道を間違えたのだろう、と思うこともある」と筆者に語った人がいる。それを変化への不安であり抵抗であると捉える事も可能であろう。しかしそうしたアンビバレンツな気持は、むしろ至極自然なものでもあるように思う。対象への依存、そのとき生じるころの両面。どちら気持もふまえ畏敬の念を持ちつつ接することが臨床家には必要ではないだろうか。

依存に関するアンビバレンツな気持を、切断するのでもなく、混ぜてしまうのでもなく、両方とも同時に認識する。その結果、どちらに転ぶかは、それは誰か第三者が指示できるようなものでもない。物の怪を含めて生きるか、隠して生きるか、どちらが良くて悪いという問題ではない。それは結果に過ぎない。その過程こそが本質である、とまでは云えないとしても、しかし過程にこそより大きい要素が潜んでいるように思う。

Schizoidはsplitをその基礎とするが、分裂はいわばやむなく生じたことであり、統合だけが唯一の回答ではないだろう。現実の状態を見て、分裂を分裂のまま引受けていくことができるのなら、それは「成熟したschizoid」とでも呼べる状態かもしれない。尤も、“成熟した”という視点を入れている時点で、結果にしがみつく物の怪に囚われているのかもしれないが。

<文 献>

- 土居健郎(1993) 注釈「甘え」の構造 弘文堂
Fairbairn,W.R.D.(1952) *Psychoanalytic studies of the personality*
Tavistock Publications (山口泰司訳(1995) 人格の精神分析学 講談社)
Guntrip,H.(1971) *Psychoanalytic theory, therapy, and the self* Basic Books
(小此木啓吾・柏瀬宏隆訳(1981) 対象関係論の展開 誠信書房)
狩野力八郎(1986) スキゾイド患者について—転移状況における治療者の反応から—
精神分析研究 30(2)71-81
北山 修(1985) 錯覚と脱錯覚 岩崎学術出版社
北山 修(1993) 言葉の橋渡し機能およびその壁 岩崎学術出版社
Klein,M.(1946) *Notes on some schizoid mechanisms* the International Journal of
Psycho-Analysis 27(3.4)99-110
小此木啓吾(1993) シゾイド人間 筑摩書房
関知恵子(1982) 人格適応面から見た依存性の研究—自己像との関連において—
臨床心理事例研究 9.230-249
Winnicott,D.W.(1958) *Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis*
Tavistock Publications (北山修監訳(1990) 児童分析から精神分析へ 岩崎学術出版社)
Winnicott,D.W.(1965) *the Maturational Processes and the Facilitating Environment* the
Hogarth Press (牛島定信訳(1977) 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社)
Winnicott,D.W.(1971) *Playing and Reality* Tavistock Publications
(橋本雅雄訳(1979) 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社)
山川裕樹(1996) 青年期のschizoid心性 京都大学教育学部卒業論文(未公開)
【補記】本論文は、京都大学教育学部の卒業論文として提出した論文を元に、大幅に加筆修正したものである。

-
- i 項目作成にあたって使用した論文は多岐に及ぶ。文献リストに載せたものもあるが、紙幅の都合上、全て挙げることを断念した。以下に執筆者氏名と発表年を記載することでかえさせていただく。祖父江典人(1995) 狩野力八郎(1986) 深津千賀子(1986) 相田信男(1985) 木谷秀勝(1990) 室津恵三(1991) 市田勝(1993) 服部正康(1992) 山崎剛(1990) 小牟田豊美(1993) 水俣健一(1992) 館直彦(1990) 野々村説子(1992) 小此木啓吾(1993) 北山修(1993) Fairbairn,W.R.D.(1952) Winnicott,D.W.(1958,1965,1971) Laing,R.D.(1960)。
ii また、第5因子である対象の物扱いについては、クラスター間の有意差が分散分析により見出されなかったことから、今回の考察では取上げていない。
iii 高屋奈月『フルーツバスケット』白泉社。1998年—(2001年現在連載中)。

(博士後期課程3回生、心理臨床学講座)